岳　10　月

宮坂静生
推薦

水の修羅見せじと蓮葉勢ひをり　国見敏子
向日葵に嵌められたるか兵の死は　矢島　恵
萱草のあれは謀反の花の色　久保美智子
星明り草のごとくに息したき　田村道子
水澄むや土偶に着せむアンギンを　清水逍径
濃竜胆卒寿の翁の志　宮地良彦
稚(いとけな)き言葉に倦めり原爆忌　眞榮城いさを
磔像の眼窩を深く晩夏光　志摩晴樹
人は星へ星の骸はほうたるへ　山田千春
ゴビ砂漠少年一人西瓜売る　河西久恵
生きるとは諦めぬこと梅雨穂草　若月はつ江
脚強きヤンバルクイナわれは杖　上江洲萬三郎
グラナダの風の匂ひの花石榴　荒井典子
雲の峰ぶつきらぼうの変声期　大島孝子

*

門ごとの語らひのなき魂迎　中山賢助

大根蒔く老いの多忙をしあはせと　塩原英子
老鶯や大壺罅は谿の形(なり)　安部克詠
地蔵さまも餡ぶ好きかえ盆の月　木村由里子
日本は金魚を死なすほど平和　岩上諒磨
吾が生涯一朶のごとし雷雨去る　千田幸子
無事でゐることが仕事や送り盆　柴野公子
秋立つや蛻(ぜい)変(へん)の時つひになく　田中利政
秋灯消して夫へのあつきもの　森　玲子
苦瓜や緩き暮しに慣れすぎし　柾木幸子
夕蟬の一樹家郷のごと仰ぐ　渡辺真帆
思ひきり絞る水着や旅了る　海野恵子

*

曼珠沙華見えぬまで父働けり　重親利行
跳ぶ刹那飛蝗の背のみづみづし　阿部薄荷光
梅干の火傷しさうに塩を噴く　小形信子
八月の影くつきりと傀儡たり　田原章弘

岳俳句の現在　十月 (506)

―同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭寸言。ことばと沈黙との関わりを考えている。ことばは何も言わない沈黙の世界を背景に、沈黙から生まれてくることは周知であろう。沈黙には二つの世界がある。私がそこから生れてきた生前の沈黙の世界とやがて私が入っていく他界の沈黙の世界である。人は二つの沈黙の世界の中間にいる。前者からはことばの「純潔さと根源性」、後者へはことばの「風のように吹き過ぎてゆく儚なきものの哀しみ」とを同時に人は持つことになるという。これは『沈黙の世界』（M・ピカート、佐野利勝訳）に書かれているジャン・パウルのことばであるが、ピカートがいうように、現代人のことばはただ騒がしい「騒音」と化して二つの「沈黙」の世界からは遠くなっている。ことばの原初を捉えようとする俳人はもう一度「沈黙」に立ち戻りことばを見直すことが大事であろう。

水の修羅とはなにか―生の根源か

水の修羅見せじと蓮葉勢ひをり　国見　敏子

夏の蓮池を見る。蓮が葉を猛然と茂らせ、池の本体である水の混沌を覆い隠している。蓮は花が極楽浄土を暗示するものであれば、水も平凡な河川の水とは違い水の中の水。そこに「水の修羅」を認めた着眼は鋭い。水の修羅とはなにか。透明である水の本性が泥水と化し、汚い。案外水は濁るのがこの世の本性かもしれない。一つの問題提起の作とみる。

向日葵に嵌められたるか兵の死は　矢島　恵

南島で戦死したわが父への悼句と読んだ。向日葵畑が戦場とは思われないが、向日葵に魅せられ身動きとれないで、向日葵が発する強烈なことばに雁字搦めになっての死。無惨な死をそう思うことで父も自分も癒されるのであろう。

星明り草のごとくに息したき　田村　道子

比喩に生彩がある。大地との一体化を溶けるように感じさせる。われ―対象という構図を崩しているのがいい。

水澄むや土偶に着せむアンギンを　清水　逍径

「アンギン」は信濃川流域の新潟県内で現在でも見受けられる、青苧やいら草織の素朴な布。縄文土偶に着せようとは視点の低い呟きのような作。米どころ越後平野の暮らしは西日本地域の弥生時代の農耕生活を引き受けるというものではない。蝦夷地の暮らしを継承する重厚さがある。

濃竜胆卒寿の翁の志　宮地　良彦

九十六歳の作者。矍鑠などと讃えることは形式ばった誉め言葉に過ぎない。真から生き生きされている。知力、体力の総合力が秀でている。晩秋まで衰えない「濃竜胆」の粋が卒寿の象徴とはご本人の弁。真からの翁。

稚き言葉に倦めり原爆忌　眞榮城いさを

広島、長崎の原爆投下による死者を悼む忌日というと中学生などの詩文が朗読される。もちろん悪いことではないが、マンネリズムのワンパターン。「倦めり」の評が鋭い。沖縄在住の作者だけに身を切る批評だ。

磔像の眼窩を深く晩夏光　志摩　晴樹

長崎の日本二十六聖人像をふと思い浮かべた。舟越保武作の西坂公園にある磔像への晩夏光から、切支丹弾圧の歴史の深部を考える。「眼窩を深く」により、哀しみが地貌へ喰い込み、無限の沈黙に訴えている。

人は星へ星の骸はほうたるへ　山田　千春

死して空の星になる。星宿になり損ねた流星は螢になる。一つの物語を考え、説得力があろう。

ゴビ砂漠少年一人西瓜売る　河西　久恵

ゴビ砂漠へ行ったことがないので、砂漠のオアシスなどには西瓜売がいるのであろうと想像する。オーストラリアの砂漠にある一軒の売店では、雑貨をなんでも商っていた。砂漠に少年と西瓜。この映像は普遍的な個性がある。未来ではない、ただ今をいかに生きるかだ。

生きるとは諦めぬこと梅雨穂草　若月はつ江

気力である。諦めは敗北だ。粘りに粘る。人生訓が十分に詩情を孕んで力がある。作者の体験詩と見たい。

脚強きヤンバルクイナわれは杖　上江洲萬三郎

西表島のヤンバルクイナは世界遺産になった。早くて強い脚力がある。それに比べて吾輩は杖の身。ただし気力は人一倍あるというのであろう。

グラナダの風の匂ひの花石榴　荒井　典子

地中海に臨むスペインのアンダルシア地方の都市グラナダ。中世のアルハンブラ宮殿があることで周知の地。いささか名所旧跡案内俳句であるが、花石榴に通う「風」に注目した。風は地貌の根源に当たる。

雲の峰ぶつきらぼうの変声期　大島　孝子

真夏の少年の不調和。私の関心は生き難い現在をどう切り抜けるかにある。ことに声変りで巧くふるまえない少年の哀しみに心を寄せたい。長い句歴の作者へ推薦句がうれしい。

今月の秀句

萱草のあれは謀反の花の色　久保美智子

百合に似た橙赤色の、一日だけの花を付ける。ヤブカンゾウが名高い。古くは「忘れ草」と呼んだ。信長に歯向かった明智光秀ではないが、花の色が「謀反」を思わせるとは説得力がある。混濁が滲む。桔梗の紫、百合の白、カンナの朱とも違う。酷暑の夕方に見ると世は謀反だらけのようだ。謀反も生きる業のようなものか。

老いの多忙が生き甲斐 ― 大根蒔く幸せ

大根蒔く老いの多忙をしあはせと　塩原　英子

素直な句だ。平凡といえば平凡。このような地味で当り前の生き方ができることこそ貴重だ。老いても現役でやるべきことがある。現代の老人が置かれている高齢社会の特徴である。隠居などできない。ぴんぴんころりは最高に「幸せ」なことだ。老健施設へ入るのが理想ではない。死ぬまで、いかに働けるか。みんなが「大根蒔く」社会を目指せ！

老鶯や大壺罅は谿の形　安部　克詠

作者は陶芸に堪能である。大きな壺の罅が「谿の形」とは深い罅であろう。出来損ない、失敗といえば人間の狭量だ。そこに自然の不思議さを感じ、意外な天然の技を受け入れている。夏鶯を「老鶯」とはよくいったものだ。掲句には相応しい。ことばに因る自在さが内面の深さを暗示している。

今月の秀句

門ごとの語らひのなき魂迎　中山　賢助

東日本大震災は十年経っても魂を返してくれない。語るべき魂は太平洋の藻屑となって家族のもとに帰されていない。仙台在住の作者。平凡な地味ないい方で、真実を語る。そこに無限の哀しみがある。門火の焚きようがないのである。

地蔵さまも餡ぶ好きかえ盆の月　木村由里子

新潟県小千谷での釜蓋一日旧七月一日を「盆ぼち一日」という。寺へ供え物をする。「餡ぶ」は餡入りおやきのような餅。屑米に雑穀や蓬なども入れた由。「あんぶころころころがって地蔵さまのところまで」と唄う。地蔵が食うてしまい、追い駆けて行った爺様が地蔵の口元に餡が付いているのを見て、さてはという話。「好きかえ」の方言がやさしい。

日本は金魚を死なすほど平和　岩上　諒磨

世界は殺戮が横行する中で、この夏は金魚が死んだことを哀しむとは。「平和」という騒音に近く無意味化されつつあることばを何とか、本来の沈黙を踏まえた真の意味を籠めたことばにしたいと奮闘する。軽い表現でありながら、実がある。彗星のように出現し明星になりつつある。期待の星だ。

吾が生涯一朶のごとし雷雨去る　千田　幸子

迫力ある生き方を省みたものか。わっと来て忽ち去る激しい雷雨から半生を振り返る。「一朶」はひと塊。気合が入っている。作者が居る奥山源丘一門の伊東句会、盛況である。

無事でゐることが仕事や送り盆　柴野　公子

無事がなにより。離れた子供には親が丈夫で身辺のことができればひと安心。折から盆、親は一日を無難に過ごす。子供ばかりでなく、仏の夫も喜んでいる。よしやよしや。

秋立つや蛻変の時つひになく　田中　利政

実りの秋を迎えた。しかし、自分は省みるに殻を破り生まれ変わることもなく来てしまった。古来、どれほど多くの詩人がこの呟きを嚙みしめたことか。詩人から俳人へ。透析の合間を句会に来られる作者の誠実な歩みが窺える作である。

秋灯消して夫へのあつきもの　森　玲子

夫の秘密の函を開けた。中に作者十八歳の時に彼に出した愛の手紙と四葉のクローバの栞が赤いリボンで結んであった由。いまわのことばが「かわいい玲子ちゃんありがとう」。三回言い、逝去。折からバレンタインの日であったとか。

苦瓜や緩き暮しに慣れすぎし　柾木　幸子

「苦瓜」は俗にゴーヤー、苦い。ふと気がつくと、暮らしに緊迫感がない。いささか惰性に流されている。コロナ禍の日々はマスクして、凡々。感性が澄んだ作者だ。鋭い。

夕蟬の一樹家郷のごと仰ぐ　渡辺　真帆

夕方ひぐらしが鳴く大きな一樹を仰ぐ。心に沁みる。ふるさとと呟く。満ち足りた思いだ。幸せ感に包まれる。巧い。

思ひきり絞る水着や旅了る　海野　恵子

夏の旅の間に、水着を使った海水浴もあった。また来年と洗濯をした。水着をきつく絞る。楽しさが込み上げる。これで今夏の旅もおしまい。水着に絞ったのが秀逸。

青雲集

曼珠沙華見えぬまで父働けり　重親　利行

働き者は秋に本領を発揮する。赤い曼珠沙華が闇に隠れるまで働く父。働くことが美徳であった時代にひたすら働く。田を作りたくても休耕田にしなければならない時代の趨勢を理解しない父なのかもしれない。こんな父に共感する。

跳ぶ刹那飛蝗の背のみづみづし　阿部薄荷光

飛蝗に集中して、みずみずしさに注目する。跳ぶ刹那に背の翅を割る。畳まれていた外気に触れない翅の青さにはっと気づく。いのちを感じる。飛蝗の根源に触れた句である。

梅干の火傷しさうに塩を噴く　小形　信子

塩漬けの梅の実を日に晒す。臙脂色が日々深くなる。火傷しそうは大袈裟であるが、塩を噴き出す梅干の強さを感じた把握には精神の柔軟さがある。柔軟さが俳句で求めるもの。

八月の影くつきりと傀儡たり　田原　章弘

八月は日本人がみんな木偶人形（傀儡）になったような月だ。二つの原爆にやられ、一月遅れの盆を迎える。抜け殻のように身を空っぽにして過ごす。傀儡を描き、自分を含めた日本人を描いているのが秀逸だ。

他に岳集、青雲集から推薦候補作をあげる。

逝く夏へひとりぼつちのラブソング　渡辺　秀雄

ゼウス妃の乳房の彼方天の川　吉澤　清

川端は母に逢ふとこ盆迎ふ　浦田　絢子

捩花の螺旋の先やミサの鐘　小口　洋子

推敲・添削 ㊶ ●●●●●●●●●● 宮坂　静生

○このように推敲し添削する

原句　夏暖簾古町くぐれば人溢ふる　　船坂　昌文

添削　夏暖簾飛騨の古町人溢る

「くぐれば」が要らない。「夏暖簾」があれば商店と人が連想されるので、古町を飛騨と具体的に紹介するのが効果的。

原句　夜明の宿馬籠はすべて青葉坂　　藤森　岳仁

添削　藤村の馬籠はすべて青葉坂

「夜明の宿」は藤村の「夜明け前」を踏まえたものか。夜が明けた宿が不明。ここは普通に藤村と置くのがいいか。

原句　今年竹白き化粧が凛と映え　　池田　康樹

添削　今年竹真白き意志の凛と映え

「白き化粧」が判らない。竹につく白い粉が連想されるが、「凛と映え」から竹が持つ意志の強さを表現したらどうか。

原句　葉ごもりの熟し梅の実地に媚びる　　池田　康樹

添削　葉ごもりの熟し梅の実地に紛る

「媚びる」は艶っぽいことをいったものか。見方に作者の気持が出る。「紛る」の方が土への自然な見方ではないか。

原句　大空襲胎児の儘で逝く素秋　　小林多美子

添削　大空襲胎児の儘で逝きし秋

哀しい句だ。下五音が詰め込み過ぎ。ここは「秋」でよい。

原句　日向葵の同じ方向く軍如し　　小林多美子

添削　向日葵の同じ方向く軍の如

「向日葵」を間違えないこと。軍隊の隊列を連想したのか。

原句　玄関の空蟬何か語らげに　　渡辺　正剛

添削　玄関の空蟬何か話したげ

「語らげに」は語りたいの意か。「話したげ」でどうか。

原句　まどろむや初蟬の声韻を踏む　　中井　一洋

添削　初蟬の声のしらべかまどろめり

同じ繰り返しをいったものか。眠りながら聞くともなく聞きながら昼寝をしている様子を表現したものであろう。

原句　乳房のやうな無花果がぶりとす　　新野　加代

添削　乳房のやうな無花果一口に

「がぶりとす」は豪快であるが、無花果なので、優しく。

◎個人相談コーナー第二回　成田光一

一生懸命なんですが、上達しません。私の句のどこがいけないのかご指示ください。「一、古写真老ひてボロボロ秋の風」「二、飛騨っ子に涼しく風の吹く夜かな」「三、秋善光寺夢と弾けた千曲川」「四、夏木立清けし風の泉あり」「五、干し柿に我が子のよふに世話女房」

応対寸評　一は仮名遣いが間違い。「老ひ」は歴史的仮名遣いでも「老い」。古写真・老いる・ボロボロ・秋風は全体が古いだけで新味がない。捨てた方がいい。二は「どの子にも涼しく風の吹く日かな」（飯田龍太）に似過ぎる。有名な句は承知しておく。三は「夢と弾けた」の意味がわからない。善光寺と千曲川両方を一句に盛らず、どちらかに。四「夏木立」と「泉」は共に夏の季語。泉を主に木立でいい。一句一季語に。「泉」と「清けき風」も連想が当然すぎる。清々しいだけでは平凡。五は「干柿にわが子の如く手をかけつ」。